

2017年12月10日

麻生教会主日礼拝 説教

「アーメン・ハレルヤ」

ヨハネの黙示録18章21節～19章4節

久保哲哉牧師

1. 麻生教会週報の変更点 ー待ちに待った今日という日ー

みなさんは、今日から週報の表記に「2点」、変化があることにお気づきでしょうか。1点目は週報の表紙にあります。教会員ですでに役員会速報をご覧になられた方はおわかりかと思いますが、婦人会が名称変更を決議し、先週の役員会でこれが承認されたために、本日より婦人会の名称が「ぶどうの会」となっています。その理由については今日お話しする「いとま」はないのですけれども、新年、1月発行の婦人会連合の地区ニュースの巻頭言で書きましたので、その内、週報ボックスに入ると思います。そのときにどうぞご覧いただければと思います。一言でいえばすべては「伝道」のためです。すべての女性に開かれた会とするために1年半以上もの間議論してこの名になりました。名称は変わりましたが、日本基督教団の正しい信仰とは何かを問うてきた「婦人会連合」とはこれからも深い絆で結ばれていくことを願っています。

また、もう1点はこれまで礼拝の進行をする者を「司会者」としていましたが、これを「司式者」と改めました。これは今月の役員会で「ぶどうの会」所属の役員から提案があったことです。礼拝とは神と人とが会う場です。人と人との交わりのあるならば「司会」でいいと思うのですが、礼拝とは神と人との交わりの式(正式名称は礼拝式)といえます。ですから、「司会」よりさらに一步踏み込んだ表現をとる必要があるのでしょうか。わたしどもと伝統を同じくする札幌教会もこれを「司式者」と呼んでいますので、これに合わせました。5年前に着任してから気にはなっていたのですが、他になすべきことがたくさんありましたのでそのままにしていた所、この度、役員

の中から申し出がありましたのでそのようにしました。小さな変更ですが、わたしたちの信仰にとっては大切なことです。この変更が5年後、10年後、意味をもってくるとの思いがあります。そのような変更を今日という日にくることを牧師としては不思議な巡り合わせとしてみております。

というのも、これまで麻生教会では半年の間、27回という回数を重ねてヨハネの黙示録を読んできました。本日ようやく、19章に入ったわけですが、僕は今日という日がくるのを僕は待ちに待っていたのですね。なぜ待ちに待っていたのか。

これまで黙示録では様々な「災い」が巻き起こる様子が神のビジョンとして語られてきましたけれども、それも18章の最終節を最後とし、黙示録は19章からクライマックスを迎えることになるからなのです。

つまり、悪しき人間にとっての「災い」の描写が終わり、正しくされた者(つまり洗礼を受け、罪赦された者)の「勝利」が描写され、悪しき様々な勢力の滅びが示されていく。その転換点が今日、ついにやってきたのですね。

特に先々週から歩んだ苦難の日々がこのうれしさに拍車をかけているのだろうと思われます。というのも、先週の礼拝で触れたことですが、先週の聖書箇所は「不幸だ、不幸だ」と3度不幸が出る箇所でありまして、準備するのも難儀したのですが、現実の実生活を鑑みても牧師の家族や友人、教会員の皆さんや幼稚園の子どもたちにも明らかに「災い」と思えるような様々な出来事があった週であったと紹介しました。このようなときはただただ祈って、苦難が過ぎ去るのを待つほかないと信じていたのですが、主は意外な所から逃れの道を用意してくださるという思いをまた新たにいたしました。

これは先週の火曜日に、麻生教会の礼拝堂で葬儀を行った時のことです。今日の週報に載せておきましたが、このたび天に召された青山茂さんは今日、司式にあたっている青山力さんの弟にあたる方です。あとで力さんには短く挨拶をいただくようお願いをいたしましたけれども、この葬儀は内々で行いましたので事前にみなさんに通知はせずに、週報にのみ載せる形となりました。茂さんは主の不思議な導きによって晩年、深川のルーテル教会で洗礼を受けられ、現在は教会から離れていたようでありますけれども、様々な事

情がある中で、教会で葬儀を挙げる事ができたことはひとえに神の愛という他はないという思いがいたしています。諸事情で30分ほどの葬儀礼拝。牧師を含めて8名の参加者ということでしたが、とても恵まれた式となりました。この葬儀礼拝に明確に力をいただきました。

公私ともに色々と不幸なことが続きましたので、そんな不幸の数々に負けている場合ではない。神の言葉が、礼拝が道を開くというのは本当のことであることを新たに知らされました。

アドベントの第一週はいつも病気の方を見舞うことにしているのですが今年はやめようかと弱気になっていましたが、そんなわけで不幸が続く中でも御業は進むことを信じて、主に押し出され、水・木・金と三日間で、予定通り6名の方のお見舞に伺う事ができたことはうれしいことでした。

クリスマスの訪問ではいつもぶどうの会が作ってくださったクリスマスリースとアドベント・カード。それと聖餐式を祝うためのパンとぶどう液をもって、なかなか教会に来ることができなくなっている方々を見舞います。

いつもは「主我を愛す」のプリントを一枚もって行って、聖餐の際にこれを歌うのですが、今回はお伺いする方の好きなクリスマスの歌を歌いたいと願い、讃美歌を1冊もっていきました。今日の説教題「アーメン、ハレルヤ」に触発されてのことです。皆、教会に来ることが少なくなると讃美歌を歌うことがなくなるので、久々に一緒に讃美歌を歌うと非常に喜ばれます。

2. 「ハレルヤ」の意味・・・汝ら神を讃美せよ

それで、ここから本題ですが、今日の箇所には3度で「ハレルヤ」という言葉についてです。旧約のヘブライ語でハレルヤとは「ハラル」と「ヤー」という二つの言葉が一つとなった言葉です。「ハラル」は「汝ら褒め称えよ」という意味。「ヤー」は「ヤーウェ」つまり神の省略系です。ハレルヤコーラスなどで非常に有名なので、聖書にたくさん出るように思っていたのですが、以外なことに新約聖書では黙示録にしか出ない言葉で、それも4回しかでてきません。旧約の特に詩編ではよくでるのですが、新約で四度出る内の3回が今日の箇所に出ていたというのは大きなことだと思います。

何故、今日の箇所でのこのハレルヤという歌声が三度(完全数)響くのか。その理由は18章の21節にあります。再び読みましょう。

「すると、ある力強い天使が、大きいひき臼のような石を取り上げ、それを海に投げ込んで、こう言った。大いなる都、バビロンは、このように荒々しく投げ出され、もはや決して見られない(ヨハネの黙示録18章21節)」

ここでいう「大いなる都バビロン」とは当時の「ローマ帝国の経済支配の力」であって、「わたしたちを神から離れさせる力」であると何度か解説をいたしました。このバビロンがついに、海の中に荒々しく投げ出され、滅びに至る様子が記されています。この「荒々しく投げ出され」とはある翻訳によれば「振り回されて投げ捨てられる」とされていました。

この言葉を見るとある教育者の言葉を思い出す。以前、礼拝で紹介したことがあります。ある教育者はいった。「現代社会は洗濯機のような構造をしている。洗濯機の中央は無風。台風目のようなもの。しかし、弱く、経済社会に適応できない貧しい者はその外側で振り回されている。現代日本はそのような社会構造となっている」。その通りだと思います。

また最近、フェイスブックで僕の高校時代の聖書の先生・チャプレンであった方のコメントを見たのですけれども、次のようにありました。「心あるキリスト者においてはこの難局を打破するために必死の戦いを展開している。私は敢てキリスト者の革命的働きが世界に希望をもたらすと言いたい。相変わらず日本のマスメディアは社会のフェイクニュースを通じてトランプ、安倍叩きに終始しているが、米国の指導的キリスト者は自国の不況からの立ち直りのために仕事を増やし収入を伸ばす努力を重ねている。働いている限り道が開けるとの強い信念をもって努力している。ホームレスが路上にあふれているのを見て誰も現状維持が良いとは思っていない。」

この「働いている限り道が開ける」というのが信仰の言葉ですよね。信仰が「ない」所では労働には経済的恩恵のみをみることになりますので、このような表現にはなりえないでしょう。神から与えられた「天職」。神に必要と

され、隣人にも必要とされ、使命(ミッション)をもって働くことができる仕事を創造する。そのことでもって「道は必ず開ける」「神の国がこの地に実現する」との信念(神への信頼)は見習う必要があるのでしょうか。自らの力で開くというよりも、神が開いてくださる信仰とってよいでしょう。そしてそのときに「ハレルヤ」との讃美の声が響くのでしょうか。この、讃美の歌声を響かせる 때가必ず来る。この神の導き・神の守りを信頼して歩む他はないと思わされています。

3. 「アーメン」の意味・・・代々の聖徒の信仰を「まね」することから始まる信仰

また「アーメン」についても触れましょう。この「アーメン」という言葉もヘブライ語で「然り」「そうです」「その通りです」という意味です。の言葉です。ユダヤ教の時代から礼拝の時などに司式者の祈りの言葉や会衆で行う信仰告白に対する「賛同」の意味で用いられてきました。

今、麻生教会ではこのクリスマスに洗礼を志す方が2名起こされまして、先週の役員会で承認されました。僕の場合は全部で9回ほどかけて洗礼の準備として「学びの会」をもっているのですが、一つ、これを学んでおけばよかったと思うことがこの「アーメン」という言葉についてなのです。次回から、この「アーメン」の学びも加えて10回の講座にしよう決めました。

私たちは礼拝の度ごとに「使徒信条」を告白しまして、そして最後にアーメンと唱えているわけですが、この「アーメン」という言葉について、今日の聖書箇所ではない所の説教で、加藤常昭牧師が次のように語っていました。そのまま読みます。

「信仰の告白をするというのはどういうことか。昔から伝えられているこうした信仰の告白を口まねでもいいから口にすればいい。我々の教会の長老会の受洗者諮問を思い起こします。洗礼を受ける志願者を迎えて信仰の言葉を聞き、ときどきこう聞きます。あなたは主の日の礼拝で使徒信条を唱えているが、それを全部信じますか、と。「はい」とはつきり言う人もある

けれども、言いよどむ人もあります。「そう言われると少し困る。「陰府にくんだり」とか「再臨」とか、充分にはまだ咀嚼していない言葉もある」これをすべて必ず堅く信じて、必要ならば、きちんと説明できるかと言われると、ひるんでしまう。たぶん仲間にボーレン先生(加藤先生の師匠)がおられたら「口真似でいいでしょう。まだ自分で説明できなくてもいいでしょう。皆の真似をして信じていますといえればいいでしょう」と言われるでしょう。それは、信仰の学びをいい加減にしていいということではありません。もっと大事なことは、古来キリスト教会が信仰の言葉として言い表してきた最も深いところにあるのは、神の言葉であるイエス・キリストに対する信頼、神は語られる、神はみわざを行うということに対する信頼であります。先ほどのドイツの牧師の言葉で言うならば、我々が愛の国、正義の国を建てなくてもいい、自力でそんなことはできない、神が必ず、愛に、正義に勝利をもたらしてくださる。我々の信仰に確かさを与えてくださる、という確信に立つということです」

ここに真理があります。昨日の土曜、麻生明星幼稚園ではクリスマスのページェントがありまして「神は愛です」という聖書箇所を説教しましたが、この信仰の言葉にただ「アーメン」と唱えるのです。最初から確信をもって唱えることができるものは少数です。だれもがああ疑い深いトマスのように疑いをもちます。疑いを微塵も持たないというのは嘘です。しかし、礼拝の中で司式者の祈りに、また讃美の歌声に、牧師の祝祷に、口真似でもよい。「アーメン。ハレルヤ」と告白をし続けることで、そこに神と人との交わりが生まれるのです。聖霊の働きが望むのです。そして信じることができなかつた者が信じる者とされる。その奇跡が起こるのです。聖書は言います。黙示録の19章1節以下を再び読みましょう。

「その後、わたしは、大群衆の大声のようなものが、天でこう言うのを聞いた。『ハレルヤ。救いと栄光と力とは、わたしたちの神のもの。その裁きは真実で正しいからである。みだらな行いで、地上を墮落させたあの大淫婦

を裁き、御自分の僕たちの流した血の復讐を、彼女になさったからである。』

ここで出る「地上を墮落させたあの淫婦」とは「わたしたちの心に巣くう罪の現実」ととることは赦されることでしょう。現実には厳しいものがあります。ここに集い、御言葉に聞くそれぞれの事情は異なりますし、なぜこのような苦難を主は強いるのか。讚美の言葉が、祈りの言葉が出ない。そのようなただ中にあるときこそ、礼拝に来て、会衆の信仰の告白、讚美の歌声、祈りの言葉に「アーメン」と唱えるのです。わたしたちの目が現実に押し流されてしまいそうなとき。そのようなときにもこの短い言葉を唱えることで、わたしたちの心と体が信仰の現実に引き戻されるという経験を何度もしてまいりました。

また、心が暗くなったそのときこそ、讚美の歌声を響かせましょう。ハレルヤコーラスは歌えないかもしれませんが、好きな讚美歌は歌うことができます。自宅のキッチンでもいい。入浴中でもよい。聖書の言葉で記された讚美歌を口ずさむことをわたしたちは赦されています。

主の十字架の出来事によってわたしたちの罪は霊的な次元においてはすでに滅ぼされること。その勝利のビジョンをヨハネは見ております。この神のヴィジョンに「アーメン、ハレルヤ。」と告白していきましょう。

今日も主に祈りをささげ、讚美歌の歌声をともにし、神は愛であることを告白していきましょう。この信仰を告白し続ける群れに、聖霊は豊かに働いてくださります。祈りましょう。

天の父なる神よ。あなたの御名をたたえます。

この現代社会を見渡すと、悪が力を振るう様がどうしても目に入ってしまいます。しかしながら、それ以上に確かな希望を私たちはあなたのビジョンから聞いております。どうぞ主の御言葉によって示されたまことの希望に信頼し、あなたが道を開いてくださるそのときまで、あなたの愛と支えによって立ち続けることができますように。もし膝をかがめる者がありましたら、その者たちを立ち上がらせる力をお与えください。互いに支え合いながら、あ

あなたの御力に頼みつつ、進むことができますように。導いてください。愛する主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

麻生教会週報

2017年度 年間主題

「祈り、伝道する教会」(使徒言行録18:9-10)

— 恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。 —

2017年12月10日No. 2392

降誕節第2主日礼拝
午前 10時30分
司式 青山 力
奏楽 和田 美恵

2017年12月10日 N o 2392

前奏
招詞 「わたしは荒野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」
(ヨハネ1:23)

頌栄 29
讃美歌 241
詩編交読 詩編96編1節～13節 (讃21-106頁)
主の祈り 週報裏面

聖書朗読 ヨハネの黙示録
18章21節～19章4節 (新474頁)

祈禱
讃美歌 247
説教 「アーメン、ハレルヤ」 久保哲哉牧師

祈禱
讃美歌 456
使徒信条 週報裏面 下
献金 65-1 (一同着席)

頌栄 27
祝禱
後奏

・礼拝開始10分前を目安に共に静まり、着席ください。
・ご事情のある場合は着席のまま礼拝なさってください。
・讃美歌の際は最後の1小節を目安にお立ち下さい。



日本キリスト教団
麻生教会

— 定例集会 —

聖日礼拝	毎日曜日	午前10時30分
教会学校 (幼・小・中・高)	毎日曜日	午前 9時
祈禱会	毎水曜日	午前10時30分 午後 7時
ぶどうの会	第3日曜日	礼拝後
聖隊練習	第2・4日曜	礼拝後
コーヒータム	第4日曜日	礼拝後